

第1問 次の文章を読んで、後の問い（問1～5）に答えよ。（配点30点）

また、この男、をかしきやうにて得たる女ありけり。得て、三四日ばかりあるに、障^{さば}ることのありければ、え行か¹で、いたう思ひいとほしがりて、月のおもしろかりける夜、かの女の家に行きて、いつしかと馬より下^おり走りて、庭を見入るれば、前^{せん}裁^{ざい}のもとに、みな女どもまじれり。かかりければ、この男、をかしきやうに思ひて、歩み寄りてあれば、この女ども、うち騒ぎて、みな板敷^{いたじき}に上^{のぼ}りぬ。男は、われに隠²るべき人こそはと思ひて、前裁の中に立ちやすらひけり。かかりけるに、くそたち来けり。我がもとに來るなめりと、この男は、見立てりけるに、男のもとには來で、薄^{すすき}のいと群^{むら}らかにて、おもしろきがもとに行きて、とばかり帰らざりければ、あやしさに、みそかに草隠²れにうかがひ寄りて、法師をぞ隠し据ゑたりける。そがもとに、もの言ひやるにぞありける。さりければ、いとみそかに立てりけるところにぞ、「などかさてはものしたまふ。早う來や」と言ひたりければ、「今參り來む。この前裁の、いとおもしろく、くまぐましき、見るなり」と言ひてぞ、立てりけるに、そこの法師のがり、間^まどもなく人やる。この男の思ふやう、捕へさせやせましと思ひけれど、我が來る事、いくばくもあらず、もとから來る人にもこそあれ、また、我が後にても、かう心憂き人により、けしからず、さとや言はれむなど思ひ、たゆたひけるほどに、「はや、こなたに、こなたに」と、この男立てるを、呼び据ゑて、すかさむと思しきさまに、たばかりて言はせけれど、この呼びに來たりける人の、「筆に墨塗³りて來」と言ひたれば、さて持て來たり。懷紙^{ふところがみ}にかか³ることを書いて、「これをまづ奉^{たてまつ}りたまへ。あはれ、忘れたまふなよ」とて、取らせたりける、

A 穂にでても風にさわぐか花薄^{はなすすき}いづれのかたになびきはてむと

と言ひて、返りことも聞か³で、ふと出でにけり。男は、かぎりなく憂じて、そのままにももの言はず。

（『平中物語』による）

（注）くそたち……「くそ」は敬称。女に仕える女房たちのことをさす。

問1 傍線部1を、わかりやすく現代語訳せよ。

問2 傍線部2「われに隠るべき人」とは誰か。本文中から抜き出して記せ。

問3 二重傍線部①②③の文脈上の意味として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ。

① 前栽

ア 盆栽 イ 玄関 ウ 植込 エ 書斎

② みそかに

ア ひそかに イ かるやかに ウ おおげさに エ あからさまに

③ たゆたひける

ア 大笑いした イ ためらった ウ 泣きわめいた エ はっきりさせた

問4 次の文章は、Aの和歌について説明したものである。空欄Ⅰ・Ⅱに入る言葉を本文中から抜き出して記せ。

Aは浮気現場を目撃した男が女に贈った歌である。慌てふためく女を「Ⅰ」にたとえている。浮気が露見したことを

「Ⅱ」と表現する。そして浮気がバレたにもかかわらず、それでもなお、どちらの男にするか決めかねている女を

「いづれのかたになびきはてむ」と表現し、和歌によって女の行為を批判している。

問5 この文章における登場人物の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 女は男の歌によって、自身の過ちを深く反省した。

イ 男に見られた法師は、女の家を訪れたことを恥じ、雲隠れした。

ウ 男を呼びに来た人は、男に筆を持ってくるよう伝えた。

エ 男は女に幻滅し、二度と女に逢うことはなかった。

オ 女の家忍び込んだ男は、薄の美しさに目を奪われた。

第2問

次の文章は江國香織の短編小説集『赤い長靴』への書評である。これを読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。（配点40点）

まず帯文の「結婚して十年、幸福と呼びたいくらいな愉快さとうすら寒いかなしみ、安心でさびしく、所在なく……」という一文を読んで、ギク、とした。自分も結婚して十八年もたっていて、思い当たる節が大いにありそうだったので。これは身につまされるかも、と思い、まずお風呂に入り、身を清め、心を落ち着けてから、読んだ。（中略）

日和子と道三は結婚して十年以上たつが、子どもはなく、介護すべき親もおらず、夫婦二人きりの生活を続けている。長く生活とともにしてきた者同士ならではの^aおざなりな会話は、ほとんど^か嘯みあっていない。けれどもそれで争いになることもなく、憎みあうこともない。そうして、なんとなく、しかし^②滞りなく日々は過ぎていく様子が、妙にリアルである。

日和子は、その日見てきたとりとめもないこと、そしてそこで感じたことを道三にうれしそうに話してきかせる。しかし道三の方は、「うん」とか「へえ」とか気のなさそうに答えるか、まったくなんの関連もないことを言ったりする。興味深いのは、そういった会話に対して、日和子が^③憤りを感じるのではなく、「笑いだしてしまふ」ことである。「^{あいづち}相槌が下手ねえ」などと言って。

もちろん道三の方は、そこでなぜ妻が笑うのか分からず「^{まの}抜けた表情」になってしまふ。日和子自身もほんとうにおかしくて笑っているのではないだろう。どこに向ければよいのか分からなくなった感情が、^{まひ}神経を麻痺させるようなかたちで笑ってしまうのではないだろうか。【A】

夫婦の二人きりの生活。子も親もいなければ、その様子を「^④家庭」という場から^{ナガ}める人間は他に誰もいない。とても閉ざされた空間である。育った環境も考え方も性格も違う他人が、ある日決意して、国の定めた「^⑤入籍」の手続きをすませ、姓を同じにして、一生添いとげます、という^⑤チカいをたてて、一緒に暮らす、一夫一婦制の日本の「結婚」。恋人同士でいるときは、なんとか相手に好かれ続けたいと頑張る緊張感と、嫌になれば別れればいい、という気楽さが伴う不安定な関係だが、「結婚」は、「安定」という保証とともに、一生のものとして引き受けなければならない「^⑥重圧」も抱えることになる。【B】

この二人には、身体的、経済的問題点はなく、それほどの「重圧」を抱え込んでいる様子は感じさせないが、会話の噛みあわなさや、大きな感覚のずれが、それでもかこれでもか、というくらい念入りに書かれていて、なぜこの二人は一緒にいるの？ と不思議な心持ちがどんだたまってくる。これは、きっと次になにかあるのだらうと、少しイジワルな期待を持って読み進めるのだが、この二人、いつまでもそのふんわりとした「ずれ」を抱えたまま、けっこう仲がいいのだ。【C】¹

そこで、おや、と思い、そして気づく。物語に期待されている「起承転結」を著者はわざとくずしているのだな、と。それからさらに気づく。結婚を決める↓結婚をする、というところまでの「起承」はあっても、その後ずると続いていく「結婚生活」には、「転結」はないのである。あつては困るものなのである。「赤い長靴」は、「転結」のない夫婦生活の、なんでもなさの中にある²とてつもない残酷さを引きだした、斬新な小説である。

二人で旅行にかけた先で、「所在ない気配」を感じた日和子は、一人でふらふらと散歩に出かけ、小声で歌を歌う。そして、ふいにこんなことを思う。

ほんとうは自分は一人ぼっちなのじゃないか。ふいに、はつきりとそう感じた。道三⁷という夫はカクウの人物で、宿に戻ったら部屋はがらんとしており、日和子の荷物だけが一つぼつねんと置いてある。東京に帰ってもあのマンションではなくて、そこには別な家や建物が建っているのではないか。

これは、日和子の心の底にある希望なのではないかと思う。もちろん、実際にはこんな浦島太郎のような状況になんかなりたくない。なりたくはないが、なりたくもあるのである。そういうアンビバレンス^b的な考えを持っている主婦たちは、言語化されてない人を含めて、ものすごくたくさんいるのではないかと予想する。自分の生活に大きな不満はない。夫のことも嫌いではない。深く心をねじ込むような関係は望んでいない。けれども、ぼう漠とした、どうしようもない淋しさ³や孤独を抱えた主婦たちが。

日和子は、⁸園芸店で週に四日、パートタイムで働き、テニス教室に通い、ときどき学生時代の友人と食事をする、という、ありふれた、幸福といえる生活を送っている。ただし、それぞれの場で適度に会話を交わしても、心からうちとけあったり、世界観を共有できるような友人はいない。【D】日和子は、確固たる価値観を持っていて、そこに相容れないものを感じているのだ。

「価値観」という点では、道三の方も、まったく相容れない要素を持っている。例えば、バザーで日和子の気にいらぬ人形型の貯金箱を買ってしまったたり、クリスマスの長靴を日和子が嫌がっているのに毎年買ってきたり、物を家中に散らかしたり、帰ってくるなり騒々しいテレビをつけたり、などなど。なのに、日和子はこう思うのだ。

私は道ちゃん以外の人たちを、全部恐いのもかもしれない。
と。それからこんなふうな気づいてもある。

道ちゃんは私を「世間」から守ろうとしてくれるけれど、私の言うことは聞いていない。私の返事は聞いていなくて、それでも私に向って喋しゃべっているのだ。

同じ空間にいても、別の世界を生きながらひんやりと依存しあう夫婦。【E】日和子の視点から書かれた部分ばかり引いてきたが、道三が主体となって語られた短編もあり、同じ時間を過ごした時の感じ方の違いが明白めいへいに分かり、なるほどねえ、と「ずれ」の角度を楽しむことができる。

この本は、現代の「夫婦」という関係性の感情の置き方について、一つのモデルケースを詳細に呈示することで、読者の結婚に対する考察をウナガすうながす機会を与えてくれる。まだ結婚していない人にも、もうすぐ結婚することが決まっている人にも、結婚して間もない人にも、結婚してずいぶんたつ人にも、結婚をやめようかな、と思っている人にも、結婚をやめたしまった人にも、もう一度結婚しようかな、と知っている人にも、それぞれの考えを深めさせてくれるのではないかと思う。

(東直子「なんでもなさ」の残酷さ)による)

問1 二重傍線部①～⑩のカタカナは漢字に改め、漢字の読みはひらがなで記せ（漢字は楷書でいいいに書くこと）。

問2 波線部a～cの文脈上の意味として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

a おざなりな

ア 間に合わせの イ 相手を傷つけるような ウ 思慮深さのある エ 楽しく盛り上がる

b アンビバレンス

ア 一触即発 イ 二者択一 ウ 唯一無二 エ 二律背反

c 明白に

ア なんとなく イ はっきりと ウ ようやく エ しらじらと

問3 傍線部1「そのふんわりとした「ずれ」とは何か、本文中の語句を用いて説明せよ。

問4 傍線部2とあるが、どのような「残酷さ」か。最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 平たんな結婚生活に生じた少しの変化も、結局元に戻るといふ残酷さ。

イ 決意のもととはじまった結婚生活が、案外だからだとしていたといふ残酷さ。

ウ 代り映えのない結婚生活が、ただ淡々と続いて行くといふ残酷さ。

エ 表面上は仲のよさそうな夫婦が、実は常に警戒しあっているといふ残酷さ。

問5 傍線部3とあるが、このような感情は夫婦のどのような関係から生じるか。このことを端的に説明した箇所を、本文中より解答欄にあう形で抜き出し、最初と最後の五字を記せ。

〔解答欄〕

--	--	--	--	--

--	--	--	--	--

関係

問6 次の文章を挿入するのに最も適当な箇所を、本文中の【A】～【E】の中から一つ選び、記号で答えよ。

そう考えると、表面化していないだけで、日和子の内面は、すでに病んでいるように思う。

第3問

次の文章を読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。（配点30点）

得意の機知でもって定子後宮の看板女房と評価された清少納言は、定子の境遇がどう変わろうとも、その場所その場所で定子の文化のアピール役を担ってゆくことになる。こんな清少納言が、漢文教養で口を滑らせ、あわや大失敗となりかねない事態を招いたことがあった。その時、すかさず助け舟を出してくれたのが、あの蔵人頭・藤原行成^①だった。定子が職の御曹司^{みぞうし}にいた時のことである。五月の夜、殿上人たちがやってきて、声高に「女房はお控えか」と言う。定子にうながされ、清少納言は応対に出た。

「こは誰ぞ。いとおどろおどろしう、きはやかなるは」と言ふ。ものは言はで、御簾^{みすだ}をもたげてそよとさし入るる、呉竹なりけり。「おい、此の君にこそ」

（「これはどなたですか。皆さんで、大声で」と私が言うと、相手は黙ったまま、御簾を持ち上げてかさこそと何かを差し入れた。呉竹だった。「あら、『此の君』じゃないの」

（『枕草子』第一三二段「五月ばかり、月もなういと暗きに」）

「此の君」。漢文教養は、清少納言が呉竹を見て言ったこの言葉にある。中国は晋の書家で有名な王羲之^{ぎし}の息子・王徽之^{きし}が呉竹を愛し「此の君」と呼んだことを、清少納言は知っていた。それが反射的に口から出てしまったのだ。「さあ、殿上の間の皆に報告しよう」。殿上人たちは清少納言の教養に驚き、清涼殿に戻った……と、ここまではいつもの〈自讃譚^{じさんたん}〉に思える。だが藤原行成だけは、その場に一人残っていた。彼は清少納言に言った。「実はみんな、女房たちと竹を題に歌でも詠もうと思つてやって来たのだけだ」。そうか、殿上人たちは和歌を楽しむつもりだったのだ。その意も確かめず漢文素養を口にしたのは、勇み足^Aだった。だが、ことはそれだけではなかった。

「呉竹の名を、いととく言はれていぬるこそ **いとほし**」。誰が教へを聞きて、人のなべて知るべうもあらぬことをば言ふぞ」などのたまへば、「竹の名とも知らぬものを。なめしとやおぼしつらむ」といへば、「まことに、そは知らじを」などのたまふ。

（「君に呉竹の愛称をさつとやわかれて、歌も詠まずに退散したとは、彼らも気の毒だったね。それにしても君はいったい誰に聞

いて、人の知っていそうにもないことを口にしたんだい？」。そうおっしゃるので、私は「竹の名だなんて、知らないわ。失礼と思われたかしら」。行成様は「そうだよ。君がそんなこと知るはずがないよね」とおっしゃった。）

（『枕草子』第一三一段）

竹を差し出した殿上人に対して清少納言が「此の君」と言ったのは、もちろんそれが呉竹の愛称だと知っていたからである。だがそのことを行成に質たされるや、彼女は一転「知らない」としらばくれた。そして行成も「そうだろう」と話を合わせた。なぜか。実はこの場面では、「此の君」という言葉は半ば地雷Bだった。清少納言は行成と話していて、そのことに気づいたのだった。

王徽之が呉竹を「此の君」と呼んだことは、正史『晋書』から幼学書『蒙求』もうきゅうまで、いくつかの漢籍に見える。そしてそこには、当時王徽之が「空宅」に身を寄せていたとある。人のいない、わびしい空き家の仮住まいということだ。これこそが百パーセントの地雷である。そのことを指摘した平安文学研究者・古瀬雅義は言う。「実家を火災で焼失して行き場が無く、鬼が出ると言われた職の御曹司住まいを余儀なくされた当時の定子たちの置かれた状況と付き過ぎている」¹。確かにそのとおりだ。それにも気づかず、清少納言はつい口を滑らせてしまったのだ。

このように清少納言の「此の君」は、出典によっては定子を傷つけるものだった。だが「空宅」という言葉の出でこない出典もある。はやりの朗詠の文句だ。清少納言は、ただそれを聞いて知っていただけと言いつづけることもできる。その逃げ場をつくってくれようとして、行成は「誰に教わったのか」と聞いたのだ。しかし清少納言は、手柄を抱えて逃げる道を選ばなかった。この際、竹の愛称など全然知らなかったことにしよう。竹を差し出した人に対してただ「あら、あなたね」と言っただけのことにすればよいのだ。漢文素養で褒められなくてもよい。中宮様を傷つけることは避けたい。しらばくれたのは、そのためだ。そしてその清少納言の思いが分かったから、行成は調子を合わせたのだ。

だが、殿上人たちはどう受け取ったのだろうか。清涼殿に戻って皆に言うといっていたが、定子を背中から打つような清少納言の粗忽そこつをあげつらって笑っていたらどうしよう。天皇が耳にして定子への無礼と不興に思われないうか。

はたして、さっきの殿上人たちが戻って来た。「裁うえて此の君と称す」。口々に歌っている。朗詠だ。「空宅」の出でこない「此の

君」だ。彼らは「空宅」のある漢籍に思い及ばなかったのか。いや、さすがにそれはあるまい。『蒙求』は貴族の子弟の漢文入門書だ。清少納言の失敗に思い当たった者もいたに違いない。しかしそれはスルーされたのだ。殿上人たちは、清少納言の知識を天皇に報告したと告げた。天皇も興じていたという。どんなに清少納言はほっとしたことか。行成は彼らと声を合わせ、朗詠を何度も歌って盛り上げてくれた。その晩、殿上人たちは当初の計画通りに定子付き女房たちと語り明かし、満足げに内裏に戻っていった。かくして清少納言は、定子後宮の文化的な一晚を先導できたばかりか、自ら捨てる覚悟をした漢文素養の手柄を、今回も手中にしたのだった。

なお、このことはやがて一条天皇を介して定子の耳に入った。「そんなことがあったの？」と定子に聞かれ、清少納言は「存じません。私は何も知らなかったのに、行成様が勝手に私の手柄に仕立てたのでしょ²うか」と、しらばくれた。どこで手柄と称賛されようが、中宮様の前でだけは絶対に否定しなくてはならない。私は呉竹の愛称を記した漢籍など知らないのだ。この答えに、定子は口元をほころばせたという。古瀬雅義は「私はお見通しよ」という感じの笑みだったのだろうと想像する。きつとそうに違いない。つまりこのエピソードは、清少納言が漢文素養を開陳して殿上人や天皇に褒められたという〈自讃譚〉ではない。彼女が大変な失敗をしでかしそうになった時に、そのことに気づかせてくれた行成と、見逃してくれた殿上人や一条天皇、全部分かりながら許してくれた定子を記す〈話〉なのだ。

(山本淳子『枕草子のたくらみ』による)

(注) 定子……一条天皇の中宮(皇后)。

職の御曹司……中宮職の庁舎。中宮の仮の御座所ともなった。

朗詠……平安中期の詩歌集『和漢朗詠集』のこと。

問1 二重傍線部①～③の読みを、現代仮名遣いで記せ。

問2 傍線部A～Cの文脈上の意味として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

A 勇み足

ア 調子に乗って失敗すること イ 勇敢に物事をおこなうこと

ウ 分かったつもりになること エ 恐れをなして逃げ出すこと

B 地雷

ア 予期せぬ困難な事柄 イ 人を怒らせる事柄

ウ 関わると厄介な事柄 エ 拒絶反応を起こす事柄

C 背中から打つ

ア 人を励ますこと イ 人を慰めること

ウ 人を陥れること エ 人を裏切ること

問3 **いとほし**を適当な活用形に直せ。

問4 次の文章は、傍線部1「付き過ぎている」について説明したものである。空欄 に入る言葉を考えて記せ。

「空宅」に身を寄せていた王徽之の状況と、職の御曹司住まいを余儀なくされた定子たちの状況が こと。

問5 傍線部2とあるが、清少納言がそのような行動をとったのはなぜか。本文中の言葉を用いて、一五字程度で説明せよ。

問6 に入る言葉として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 思い出 イ おとぎ ウ 土産 エ うわさ オ たとえ

〔解答欄〕 20字